

ゲゲゲのヴェブレン：「怠惰な好奇心」をめぐる一考察

著者名(日)	小谷 敏
雑誌名	人間関係学研究：社会学社会心理学人間福祉学：大妻女子大学人間関係学部紀要
巻	18
ページ	77-89
発行年	2016
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006381/

ゲゲゲのヴェブレン

——「怠惰な好奇心」をめぐる一考察——

Veblen as Monstrous Being — A study in “idle curiosity” —

小谷 敏*

Satoshi KOTANI

<キーワード>

ソースタイン・ヴェブレン, 水木しげる, 怠惰な好奇心 (idle curiosity), 「怠け者になりなさい」,
「近代文明における科学の地位」(The Place Of Science in Modern Civilization)

<要 約>

2015年に亡くなったマンガ界の巨人水木しげるの名言の一つに、「怠け者になりなさい」というものがある。水木は夥しい数の傑作群を遺しているが、それらが彼の勤勉さの所産であることを疑う者はいないであろう。「怠け者になる」とはどういうことなのか。

この問いに答えるために論者は、アメリカ社会科学の巨人、ソースタイン・ヴェブレンの「怠惰な好奇心」に注目した。人間のなかには実利を追い求める「プラグマティズム」の性向とともに、有用性とは無関係にあらゆる事柄に関心を向ける性向が併存している。後者をヴェブレンは、「怠惰な好奇心」と呼んだ。「怠惰な好奇心」に導かれて事実を収集し、それを体系化して劇的に語る。未開時代の神話に始まるそうした営みが、様々な変遷を経て近代の機械的科学にまで進化していった過程をヴェブレンは跡づけている。何の役にも立たない妖怪の知識の収集を子どもの頃から続けてきたことが、水木の偉業を可能にした。「怠け者になりなさい」とはすなわち、「怠惰な好奇心に忠実であれ」ということではなかったか。大学とは本来、「怠惰な好奇心」に導かれた研究のなされるべき場のはずである。ところが現代日本の大学はプラグマティズムに支配されてしまった。日本のマンガの巨人とアメリカの社会科学の巨人はそろって「怠け者になりなさい」と日本の大学人を叱咤しているように思われる。

* 大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 社会学専攻

1. 「怠け者になる」とはどういうことか 一問題の提示

(1) 「怠ける権利」の方へ

マルクスの娘婿でもある19世紀フランスの社会主義者ポール・ラファルグは、過剰労働とその帰結としての過剰生産は、商品価格の低落と賃金の低下—すなわち働く者の貧困—をもたらすだけでなく、過剰な生産物の捌け口を求めての植民地争奪戦争をも招来すると主張した。古来労働は奴隷の美德であり、自由人が働くことはなかった。一日三時間以上の労働は人間を不幸にする。彼は1848年の2月革命時にフランスの左翼が提唱した「労働の権利」に抗して「怠ける権利」を提唱している(Lafargue1887=訳2008)。

一日三時間の労働で足りる世界。これはフランスのエキセントリックな社会主義者の夢にはとどまらなかった。20世紀イギリスの偉大な哲学者バートランド・ラッセルは、人類が享受する精神的な成果はすべて怠惰や閑暇の産物であるのに対して勤勉の産物はすべて戦争のために組織されていったとして、ラファルグと同様、怠惰を讃美している(Russell1935=訳2009)。

やはり20世紀イギリスの偉大な経済学者であるジョン・メイナード・ケインズは、大恐慌の時代のマドリードでの講演で、科学技術の発達と複利計算に基づく富の増殖の結果、十分に豊かになったわが孫たちの世界では、一日三時間しか人々は働く必要がなくなり人々の主要な関心事は経済ではなく学問や芸術のような高尚な事柄に移っていくという楽観的な見通しを示している(Keynes1930=訳1981)。

ケインズが予言したのは、「100年後」のわが孫たちの世界であった。このマドリード講演は、1930年に行われている。1930年を10数年の後に控えた現在、「1日3時間」とまではいかずとも、西欧諸国では目覚ましい労働時間の短縮が実現している。ドイツでは数週間にわたる長期休暇を取得する権利が保証されているし、フランスでは法定労働時間は7時間である。さらにスウェーデンではそれを6時間に短縮しようとする動きさえある。

他方、極東の経済大国日本の現状はどうか。勤労者の労働時間は、統計上は減少を続けているものの、サービス残業やフロシキ残業が横行している。法定労働時間は一日8時間、週40時間と定められているものの、労使双方の合意(サブロク協定)によって実質的に際限もない残業が可能になるような日本の労働法制の不備は世界の非難的となっている。数週間の長期休暇どころか、有給休暇さえこの国ではほとんど消化されていない。

「カローシ」ということばが世界に知られるようになったのは、1980年代の、日本の製造業が世界を席卷した時代のことであった。今や当時に比べて世界のなかでの日本経済の存在感はみるかげもなく低落しているが、過労死や過労自殺で毎年多くの人命が失われているのである。これほど働きながら(あるいはこれほど働いているが故に?)日本の一人当たりGDPと労働生産性は年々減退を続けている。

勤労は美德かもしれないが、思想史家の礪川全次も言うように、「日本人の美德であるはずの勤勉性が、深刻な社会問題を引き起こすという事態に立ち至っているのである」(礪川2014:10頁)。いまの日本社会に害を及ぼしているのは、怠惰などではなく働き過ぎである。そうであるにも関わらず勤労が称揚され怠惰であることは強い非難にさらされている。「怠けていても生活が保証されている」生活保護受給者や公務員がパッシングに晒されている。「経済的に困窮した人を助ける必要がない」と答える人の比率は日本が突出して高いという調査データがネット上で話題になった。経済的に困窮している者は怠け者であり、すなわち自己責任なのだから救済する必要はない。そう考える人間がこの国では世界のなかで突出して多いということなのだろう。

人は強いられて死に至るまで働くことはない(いやいや働いている限りは勤労はそこまでエスカレートしない)。過労死は死に至るまで自ら進んで働く「自発的隷従」の心理によってもたらされている。日本思想史における勤労賛美の流れを分析した知見の上に立って礪川は、この自発的隷従を断ち切るためには人々が「怠ける勇氣」を持

つことが必要だと結論づけている（礫川 2014：243 頁）。

論者は 2013 年に 1970 年代以降に日本で生じた様々なバッシングを検証した『ジェラシーが支配する国』（小谷 2013）を上梓した。2000 年代以降に目立つのは、先にも述べたように生活保護受給者や公務員、さらにはフリーターやニート等の「怠け者」と誤認された人々へのバッシングを著名な政治家たちがメディアで扇動している事例である。こうして 21 世紀に入ると「働かざる者食うべからず」という観念はこの国のなかで猖獗を極めるようになった。そのことが人々にとっての抑圧となり社会を害していることは明らかである。そうであるならばいまこそ「怠ける権利」を、あるいは礫川の言う「怠ける勇氣」を声高く唱える必要があるのではないか。そうした問題意識から 21 世紀版の『怠ける権利』の執筆に論者は着手したのである。

（2）「怠け者になりなさい」

—水木しげるの御託宣

ところが『怠ける権利』の執筆は一向に進んでいない。もちろん私が怠けていることがこの本を書けないでいる最大の原因である。怠惰を礼賛する言説でさえ、それが世間で通用するものとなるためには、刻苦勉勵を求められるのだから、「怠ける権利」も怪しいものである。

自分の怠惰を正当化するつもりはない。ただ論者がかつて「怠ける権利の方へ」（小谷 2010）という小論を書いた時と現在との状況の変化に戸惑っていることも事実であり、それもまた筆を滞らせている一因である。このエッセイのなかで論者は、勤労の論理が日本のとくに若い勤労者を精神的に追い詰めている現状を指摘し、脱労働の必要性和それを可能にするベーシック・インカム（以下 BI）の創設を求めている（小谷 2010）。

だが 2010 年代半ばの今日、人工知能やドローンなど人間の労働力を不要にするテクノロジーが姿をみせ始めている。「怠ける権利」どころか、人々が労働市場から排除され、怠惰を強制される近未来が予感されている。また前のエッセイを書いた

時には、夢物語のようにみられていた BI の実施が多くの国々で真剣に検討されるようになってきている。これは一見好ましいことではあるが、BI を行うかわりに社会保障の切り捨てを意図しているケースが多くみられる。ただ働かないことを讚美するのはいわば資本の思うつぽになってしまうともいえない。また無邪気に BI を称揚する安易な立論は、福祉切り捨てに与するものというそしりをまぬがれないであろう。

そしてまことに情けない話ではあるが、「怠ける権利」と言いながら、「怠ける」とはどのようなことなのか、論者自身よくわからなくなってしまった部分がある。そうした迷いを生んだのが、昨年亡くなった鳥取県が生んだ偉大なマンガ家水木しげるの「怠け者になりなさい」ということばであった（水木 2007）。

小学生のころの水木は遅刻魔であったようだし、長じては「睡眠至上主義者」をもって任じて、学校のある日も子どもを好きだけ寝させていた。学校の勉強は嫌いで成績は不良。小学校を卒業後に大阪の園芸学校を受験した時も、ただ一人だけ落ちた。戦時中のラバウルで歩哨として見張りに立ちながら、珍しい蝶々を追いかけて持ち場を離れ、その間に彼の属した一個小隊は全滅してしまった。ラバウルの農民の「怠惰」と映る暮らしに憧れて戦後も現地に留まろうとし、社会的成功を収めた後も同地への移住を真剣に検討していた。エトセトラエトセトラ。たしかに水木の生涯をみると、彼が怠け者であり、変わり者であることをうかがわせるエピソードは枚挙に暇がないほどである。

だが戦争で左手を失いながらも下積み時代の困窮に耐え、営々とマンガを描き続けた水木は、『ゲゲゲの鬼太郎』をはじめとする夥しい傑作群を残している。創作に打ち込む水木の鬼気迫る真剣さは、大ヒットした NHK 朝の連続ドラマ、「ゲゲゲの女房」のなかのもっとも印象に残る場面でもあった。

たしかに水木は学校の勉強はできなかったかもしれない。しかし水木は若い頃から大変な読者家であり、エッカーマンの『ゲーテとの対話』を携

えて入営した。水木の名を世にしらしめた妖怪に関してだけではなく、ヒットラーや新選組、さらには昭和史に関するマンガを描いたその博識ぶりは、終生のライバルでもあった手塚治虫に勝るとも劣らぬものがあった。

水木が生んだ妖怪たちのブロンズ像を配した鳥取県境港市の水木しげるロードは、1994年の開設以来、2016年6月上旬の時点で3000万人の観光客を呼び込み、いまや鳥取砂丘と並ぶ鳥取県の2大観光地となっている。水木はその勤勉さによって数多の傑作群を生み出し、郷土に偉大な貢献をなしている。もし水木が彼のなかの怠け者性を全面的に開花させていれば、これらの偉業が達成されたはずはない。「怠け者になりなさい」という水木の御託宣を、謎めいたものを感じる所以である。

そこでいささか唐突ではあるが、本稿においては、20世紀アメリカの異端の経済学者であり社会学者でもあったソースタイン・ヴェブレンの「怠惰な好奇心」という概念を検討することによって水木の御託宣についての考察を深めてみたい。

2. ソースタイン・ヴェブレンとはなにものか —『有閑階級の理論の研究』を読む—

(1) 詐術と暴力の所産としての私有財産

アメリカはピューリタンによってその基の築かれた国である。勤勉こそが幸福な人生を約束する。それがかのベンジャミン・フランクリンを代表とするピューリタンたちの信念であった。大金持ちをあらわす「セレブ」ということばがある。これは「セレブリティ(祝福)」から転じたものであり、巨富は勤勉の成果であり、それを神から祝福された証であるというアメリカ人にもたれた信念をあらわすことばである。私有財産は勤勉の成果であるが故に肯定されるというジョン・ロックに由来する労働価値説をアメリカ人たちは自明のものとして受け容れていたのである。

しかしノルウェー移民の二世として、アメリカ中西部のウイスコンシン州の開拓部落に生を受けたヴェブレンにとって私有財産が勤勉の産物であるという見方は受け容れ難いものであった。開拓

農民であったヴェブレンの父親は、ビジネスマンによって土地を奪われるという苦い経験をもっていた。ヴェブレン自身も早くからその優れた学才を認められながら、宗教的民族的なマイノリティであったことも一因して、30代の半ばまでアカデミックポストに就くことができなかった。マイノリティであるが故に辛酸を舐めたヴェブレンは、後に「アメリカのマルクス」と呼ばれる、アメリカ資本主義に対する厳しい批判者に成長している⁽¹⁾。

南北戦争後のアメリカは、西へ西へとフロンティアを広げていった。西部開拓ブームが続くなかで、ビジネスマンたちは、アメリカ原住民や貧しい開拓農民の土地を暴力や詐術によって収奪して、そこから石油を掘り当て、あるいは鉄道を敷設することによって巨満の富を築いていったのである。「ロバー・バロン」(泥棒男爵)。この当時、詐術と暴力とによって巨富を築いたヴァンダービルドやロックフェラーに代表される大富豪を指すことばである。西部開拓ブームのなかで生まれた成金たちは、自らの金銭的能力を誇示するために、悪趣味で愚かな浪費的生活にふけっていた。かのマークトウェインは、成金趣味が世を覆う世相を「金びか時代」と皮肉っている。

1999年、皮肉にもロックフェラーの創始したシカゴ大学在籍中に公刊した『有閑階級の理論』はベストセラーとなり、彼の名を不朽のものとしていった(Veblen1899=訳1961)。本書のなかでヴェブレンは、資本主義が基礎を置く私有財産制度が勤勉な労働ではなく詐術と略奪のもとに築かれたものであることを明らかにし、詐術と略奪の上に巨富を築いた「ロバー・バロン」たちの浪費的生活の実態を鋭く抉りだしていったのである。

(2) 蔑まれた労働

同書においてヴェブレンは、人間の経済行動を支配する動機は見栄であると喝破している。未開の時代には共同体の内部に富の偏在も階級の分化もなく、人々は貧しいながらも平等に平和に暮らしていた。ヴェブレンはルソーと同じように未開の時代には、平和な「自然状態」が存在したと考えていた。

しかし人間が強力な道具を手にするようになると、勤労よりも他の共同体からの略奪が共同体に大きな富をもたらすようになる。この野蛮時代に私有財産の制度が生まれた。私有財産の起源は、優れた身体をもつ男性による女性の所有であり、私有財産とは勤勉な労働の賜物ではなく、うまくいった略奪のトロフィーなのである (Veblen1898 = 訳 61)。そして私有財産は、生存の必要を満たすためではなく、自らの能力を誇示するという見栄のために存在している、とヴェブレンは言う。

武勇と略奪に長けた者が尊敬され、労働が弱さの徴として蔑まれたのが野蛮文化 (barbarian culture) の時代の特徴である。もちろん時代が進めばあからさまな略奪は影をひそめ、身分制度によって安寧と秩序が保証される「半平和段階」(half peaceful stage) が到来する。封建時代がこれにあたる。野蛮時代に生まれた労働を蔑む心理は、この時代をも支配していた。有閑階級の制度は、日本と西欧で典型的に発展した封建時代に完成した (Veblen1961 = 訳 9)。

労働が忌むべきものであるとすれば、無為と閑暇こそが価値あるものとなる。近代以前の時代の支配層、とりわけ女性たちの華美で極度に非実用的な服装は、自らが労働をする必要がないことを誇示するためのものである。自らが閑暇を享受していることを誇示する活動をヴェブレンは、「術示的閑暇」(conspicuous leisure) と呼んだ (Veblen1898 = 訳 40)。古代ギリシャで「スコーレ」(暇) と呼ばれていた学問と芸術は、閑暇を誇示するために生まれた。ラッセルがわれわれの享受する優れたもののほとんどは、閑暇と怠惰の産物であると述べたのはこの事実を指している。野蛮文化の時代の支配層は自らの金銭的能力を誇示するために、巨大な城郭や邸宅を築き、豪華な宴会を開くなどの途方もない「術示的消費」(conspicuous consumption) にもふけっていた (Veblen1899)。

(3) 『有閑階級の理論』を読む

封建時代を脱して近代に至ると、略奪ではなく平和的な通商が社会の富の源泉となっていく。さらに機械生産の普及によって労働の苦痛は大幅に

軽減されていった。そのため労働は屈辱的で忌むべきものではなく、ヴェブレンが同書を書いた19世紀末のアメリカでは、勤労によって生活の糧を得る人が人口の大多数を占めていた。そして人々は、機械と共生することによって合理的な思考法をも身に就けていったのである。文明の発達の結果、人類は平和を愛好し、勤労を重んじる初期の自然状態にある意味回帰していった。

ヴェブレンは、当時のアメリカに存在した二つの階級を指摘している。一つは、社会を支える温厚で勤勉で合理的思考を得意と生産的 (industrious) 階級に従事する人たちである。そしてビジネスの世界を支配する、略奪的な野蛮時代の心性を色濃くとどめ、勤労よりもむしろ資産の運用によって大きな富を得ているヴァンダービルドやロックフェラーのような金銭的 (pecuniary) 階級に従事している人たちである (Veblen1899: 訳 217)。ヴェブレンが『有閑階級の理論』で活写したのは、後者の生態である。

ビジネスマンは多忙な人 (business は busy から転じている) たちであり、「有閑」というにはほど遠い。彼らの金銭的能力の誇示は、閑暇よりもむしろ「術示的消費」によってなされている。それがトウエインに「金びか時代」と揶揄された狂乱的な浪費を生んだ。彼らは趣味の悪い貴族風の邸宅に住まい、妻や子どもを着飾らせて、大きな犬を飼い、競走馬を所有することを好んだ。一方で悪行の果てに巨富を築いたことを自覚している彼らは、財団や大学を創始し、その富を社会に還元することで罪滅ぼしをしようとも試みていた。ヴェブレンが『有閑階級の理論』を書いた時に在籍していたのは、皮肉にもロックフェラーの創始したシカゴ大学であった。

「金銭的階級」に属する人たちは、野蛮時代の戦士たちにも似た、好戦的な性格と迷信深さ、そして格差序列をつけることを好む差別的な傾向を強く保持している。これらは平和な産業社会とは相反する資質である。野蛮人の心性を色濃くとどめる「金銭的階級」の者たちが技術者をはじめとする「勤労階級」の上に君臨している。「有閑階級」はその富と名声とによって強い文化的影響力を

もっているから、「有閑階級」は、古い心性を社会のなかに保ち続ける役割を果たしているとヴェブレンは言う。

ヴェブレンには今日のフェミニズムにも通じる視点がある。男たちが狩猟や戦争に熱中していた時代に、土地を耕し、家畜を飼い、日々の食事や衣服を作るといった生産的な営みは、女性たちによって担われてきた。しかし野蛮時代において女性たちは力のある男たちの所有物の地位に貶められていたのである。「有閑階級」の女性たちの華美で動きにくい衣服は、彼女たちが労働する能力をもたないことを示している。女性たちを仕事に就かせず、優雅に遊び暮らせることで、「有閑階級」の男たちは自らの金銭的能力を誇示していったのである (Veblen1898: = 訳 173)。

(4) 無限に亢進する欲望

ーケインズからヴェブレンへ

経済学史上でヴェブレンは「制度派経済学」の祖として位置づけられている。ヴェブレンのいう制度とは、市場や企業のような「経済制度」ではない。人間の経済活動は人々の行動によって成立している。人々の行動を導くものは、人間相互の、あるいは人間と環境との相互行為のなかで形成されてきた「思考習慣」に他ならない。人間の思考習慣に注目する点においてヴェブレンの経済学は、社会学との近親性が強い。そして、ヴェブレンは、女性の衣服等の日常些末なものに注目しながら人間の思考習慣の解明を行っていったのである。そうした研究の果てにヴェブレンは、人間の経済行動を支配するものとしての「見栄」を発見した。「金びか時代」のアメリカにおいては、生存の必要を充足させるためでも生活の質を向上させるためでもなく、他者への優越性を誇示することが「有閑階級」の経済行動を支配していることをヴェブレンは指摘したのである (小谷 1988)。

ケインズは、生存の必要を充足して余りある豊かさが実現した「わが孫」の世界においては、人々は1日3時間程度の労働で足りるようになり、経済は人々の主要な関心事ではなくなるとと予言していた。ケインズもちろん、人間のなかに他者

に優越したいという相対的なニーズがあり、これは限りのある絶対的なニーズとは異なり、どこまでいっても満たされることはないということは理解していた (Keynes1930 = 訳 1981)。しかしイギリスの一代貴族であったケインズには、相対的なニーズが人々の経済活動を徹底的に支配する状況は想像だにできなかったのではないだろうか。ケインズの生きた時代のイギリスは階級社会であり、人々はそれぞれの分というものをよくわきまえているはずなのだから。

「蜜の流れる大地」と旧世界の人々から羨望の眼差しでみられていたアメリカ人たちは、早くから生存の必要から解放されていた。アメリカ人たちの眼前にはさらなる欲望をかきたてるフロンティアが存在していたのである。そして植民者たちによって築かれたアメリカにはイギリスや大陸ヨーロッパ社会における階級制度は当初より存在しなかった。人々はわきまえるべき「分」をもたなかったから相対的なニーズの亢進に歯止めをかけるいかなる力も存在しない。巨富を得たものこそが神に祝福された者であるという宗教的信念も際限のない富の獲得へと人々を駆り立てていく。

第二次世界大戦の後、自由世界の覇権国家はイギリスからアメリカに完全に移行した。化学繊維や合成樹脂などのブームをもたらす新製品が生まれ、自動車や家電製品を誰もが所有することのできる「アメリカ型生活様式」が世界中に伝播していったのである。中高等教育への進学率が上昇し、全般的な生活水準が向上することによって人々の欲望の亢進の抑止力となっていた階級の壁も崩れていった。高度な資本主義は人々が、企業の提供する新製品を次々と購入することによって成り立っている。絶対的なニーズが充足できればそれでよしとする人々によって構成される社会においては消費に基礎を置く高度な資本主義は成り立たない。アメリカの覇権は、相対的なニーズに支配される社会を世界中で実現させていった。こうしてケインズの予言は崩れ去った。なるほど、ある程度の労働時間の短縮は実現できたかもしれない。しかし、今日の世界の人々にとって経済はかつてないほどの関心事となってしまったのである。

3. 「怠惰な好奇心」とは何か

(1) 本能とは何か

ヴェブレンは、『製作者本能論』において、「怠惰な好奇心 (idle Curiosity)」を「製作者本能 (instinct of workmanship)」や「親性傾向 (parental bent)」と並ぶ人間に備わった3大本能として位置づけている。本能ということばは、現在においてはもちろんのこと、20世紀初頭においてすでに時代遅れのものとみなされていた。ではヴェブレンはなぜ、あえてこの古めかしいことばを遣ったのであろうか。

生物学者ローブに依拠しながらヴェブレンは、本能 (instinct) と向性 (tropism) とを区別している。向性が、下等動物にもみられる生物の反射的、無意識なものであるのに対して、本能とは目的を志向する生物の知的で意識的なものである。心理学において本能が時代遅れのものとなったことはヴェブレンも認めている。心理学者たちはこれまで本能の名で呼ばれて来たものを細かな要素へと分解し、人間の行動を規定する究極の要因を解明しようと務めてきた。他方社会学や経済学のように制度 (社会集団に共有された思考習慣) を研究する学問において、本能ということばはなお有効性を保っているとヴェブレンは言う。制度は伝統や習慣のなかで培われてきた人間の様々な性向と、環境との相互作用のなかで築き上げられていったものであるが故に、制度を研究する者にとって、そうした人間の性向を表現することばとして「本能」以上に使い勝手の良いものは他にない (Veblen1914: 4 = 訳 1997: 5 頁)。

(2) 「親性傾向」と「製作者本能」

ヴェブレンが、人間の代表的本能としてあげていたもののうちのまずは「親性傾向」についてみてみることにしよう。親性傾向とは、「人間の親らしい心遣い」のことである。それは「自分自身の子供の幸福という問題よりずっと広い関連をもつ」。そして、「すべての思慮深い人たちは (略) 現在の世代が故意に次の世代の生活の道をより困難にすることは卑しむべき非人道的な事柄である

という見解には同意するであろう」 (Veblen1914: 4 = 訳 1997: 23 頁)。親性傾向は、最高の文化、最低の文化のいずれにおいてもきわめて一般的に支配的な、公益のための節約と効率の感情的是認と浪費的で役に立たぬ生活の感情的否認を大いに強化している」 (Veblen1914: 4 = 訳 1997: 23 頁)。「親性傾向」に支配された人々は、子どもたちの将来を損ねてはならないという配慮のもとに、効率と節約を第一義に考え、社会集団のなかから無駄を排除しようとする。この意味で「親性傾向」は次にみる「製作者」と非常に深い関わりがある。

製作者本能は、人類の長い歴史のなかでの困難な状況下における連帯の記憶に起源があるとヴェブレンは言う。未開の世界を生きる人々は小さな集団のなかで生活をしてきた。集団の存続とメンバーの生存は、一重に彼ら一人一人の仕事をこなす技量と効率性とにかかってくる。「生き残りのための基本的必要条件は、手近の物質的手段を非利己的に非個人的に最大限活用する性向と、知識と物資のあらゆる資源を集団の生活を支えるために利用しようとする強い選好とであったわけである」 (Veblen1914: 4 = 訳 1997: 30 頁)。「製作者本能は、実際的な工夫、方法と手段、効率と節約への方策と計画、熟練、創造的な仕事、そして事実についての技術的な精通と関わりを持つ。製作者本能の機能的内容の多くは、骨を折ることにおもむく性癖である」 (Veblen1914: 4 = 訳 1997: 28 頁) しかし、製作者本能はそれじたいの目的をもつものではない。「製作者本能は、ある意味では他のすべての本能に対して補助的なものなのであって、なんらかの将来の目的よりは、むしろ生活の手段方法に関係づけられるべきものと言いうるかもしれない」 (Veblen1914: 4 = 訳 1997: 26 頁)。

「製作者本能」と「親性傾向」の関係性についてみてみることにしよう。「製作者本能」においてはものごとをうまく成し遂げることが自己目的している。「製作者本能」がそれじたいの目的をもつものではない。他方、「親性傾向」には、社会集団を存続させ、子や孫の世代に惨めな思いをさせまいとする明確な目的がある。「親性傾向」の目的達成のいわば道具として、「製作者本能」

が機能しているとみることが可能だろう。

(3) 「怠惰な好奇心」とは何か

idle curiosity をここでは「怠惰な好奇心」と訳している。これまでヴェブレンの著作を訳してきた研究者たちはこのことばに、「ヒマな」、「無用な」、「無垢な」等々、様々な訳語をあてており、しかもそれらを文脈に応じて訳し分けている。いずれにしても、idle ということばは実際的な見地からは役に立たないという意味が込められている。有用性の有無に関わらず、ある対象に強い興味関心を抱くことが好奇心の働きである。好奇心とは本来有用性を志向したものではない。その意味で「怠惰な好奇心」は「二重のふたえ」にも似た言い回しである。ヴェブレンは、あえてこうした言葉の使い方をすることによって、人間の知的活動の源泉である好奇心がもとより有用性を志向したものではないことを強調しようとしたのではないか。

心理学は、人間行動に関する機能主義的な説明を行ってきた。すなわち人間とは（あるいは広く生物有機体）「役にたつ」活動をする存在だという前提に現代の心理学は立っている。ヴェブレンはこの考えを排斥はしない。しかし役に立つ行動を志向するのは別の系列も人間のなかにはある。それが「怠惰な好奇心」である。人間は役に立つことだけではなくそうではないものに対しても注意を向けている。これは人間だけではなく高度に知的な動物にもよくみられる遊び心のようなものである。怠惰な好奇心は若い個体において活発で、人間だけではなく高度な知性をもつ動物にもみられる。怠惰な好奇心が活発化するのには、共同体が平穏な状態においてである (Veblen1914 : 4 = 訳 1997 : 69-71 頁)。

4. 神話から科学へ—「怠惰な好奇心」の展開

(1) 神話—未開時代の語りの体系

「怠惰な好奇心」についてもっとも詳細な説明がなされているのが、「近代文明における科学の地位」(Veblen1961) というエッセイである⁽²⁾。

この小論においてヴェブレンは、西欧文明を他のすべての文明に対して優越的な地位に立たせた科学の興隆に対して、「怠惰な好奇心」が大きな貢献を果たしたことを明らかにしている。

人間のなかには「怠惰な好奇心」に基づいて事実（と思われるもの）を収集し、それを体系化して一つの世界像もしくは宇宙論をつくりあげドラマチックに語る性向がある。人々が平等に平和裏に生きていた未開時代のそうした語りが「神話」であった。人々の思考習慣はその時代の産業技術によって枠組みを与えられる。未開時代に人々は、農耕と家畜の飼育によって生きていた。そのため、未開人の宇宙論は誕生、成長、死、腐食といった生命史のことばで語られる。自然を擬人化するアニミズム的思考に神話の語りは支配されている。神話を読んでも何か役にたつことは書かれていない。神話は怠惰な好奇心の産物であり、実用のために創られたものではないからである。怠惰な好奇心に突き動かされて事実を収集してそれを体系化する神話作者たちの営みは、最終的には、後の科学理論に行き着く (Veblen1961 : 6-8)。

(2) 「プラグマティズム」とは何か？

怠惰な好奇心の反対物は、プラグマティズム (pragmatism) であるとヴェブレンは言う。ヴェブレンの言うプラグマティズムは、アメリカ原産の哲学としてのプラグマティズムと同一のものではない。哲学流派としてのプラグマティズムは、科学の精神を哲学のなかにもちこんだものであり、命題の真偽を実験によって検証可能な形で提示しようとする志向性をもつものであった。またダーウインの進化論に深く影響されたプラグマティズムは、人間の精神や理性の起源を動植物の環境への適応行動のなかに求めている。若きヴェブレンは、プラグマティズムの創設者の一人、チャールズ・サンダース・パースの講義を聴講している。ダーウインの進化論を称揚し、人間の思考習慣の形成を人々の置かれた環境との相互作用によって説明するヴェブレンの方法論は、優れてプラグマティズム的なものといえる⁽³⁾。

ヴェブレンが「怠惰な好奇心」の対極に置くプ

ラグマティズムとは、卑俗な意味での実用主義ととらえるべきであろう。このプラグマティズムは、役にたつことを第一義とするというだけにはとどまらない。他者に対して優越的な地位に立つことを至上の目的として、そのためには詐術と暴力を行使して、他者を貶めることさえ躊躇しない邪悪な心のあり方がこのことばのなかには含まれている。

神話の時代から、プラグマティズムの目的に資するための語りの体系はあった。神話の妥当性は、先にみとおり、いかにそれを劇的にそして破綻なく語るかにかかっていた。これに対してプラグマティズムの語りの体系の妥当性は、それが役に立つか否かである。神話作者と科学者の間には大きな隔りがある。しかしプラグマティズムの語りはそうではない。「孔子からサミュエル・スマイルズまで、この領域における進歩は微々たるものでしかない」(Veblen1961: 9)。「怠惰な好奇心」による語りは進化を続けるが、プラグマティズムの語りはそうではない。

(3) 宇宙を支配する人間の形をした神

一 野蛮時代と初期近代

ヴェブレンの歴史の発展図式に戻ろう。人間社会が未開で素朴な平和愛好段階を抜け出すと、武勇が尊ばれ、略奪が幅をきかす一方で、勤労が蔑まれる長く続く野蛮文化の段階が到来したことはすでにみたとおりである。

野蛮文化においては、「序列化された権威と隷属の体系に巧みに適応することが、死命を制するものとなり、人々は、これらのことばを究極かつ決定的なものと考えを学ぶ」(Veblen1961: 11)。未開時代の怠惰な好奇心に由来する語りの体系の代表は神話であった。野蛮時代のそれを代表するものはスコラ哲学である。この時代においても、怠惰な好奇心によって生み出された語りの妥当性が、いかにドラマチックに破綻なくそれを語るかにかかっていることに変わりはない。しかしドラマ化の基調は、神話時代の「世代、血縁、質素な生活」から「位階制、由緒正しさ、従属」へと替る。世界の創造主であり、自然法則の制定

者でもある神は、恣意的にふるまう君主に似た者として描かれる。高度な野蛮時代としての中世は、はプラグマティズムが怠惰な好奇心を圧倒し、飲み込んでしまった時代である。「すべての知識はプラグマティックであるという言明の素朴な理解は、(略) それ以前や以後のいかなる知識の体系においてよりも、スコラ哲学の知的成果のなかにこそ満足すべき確証を見出せるであろう」(Veblen1961: 12)。

中世も終わりを告げて、商業と工業が経済の主流をなす近代社会が到来する。この時代において富をもたらすものは略奪ではなく、平和な生産活動と通商である。技術の発達によって勤労は苦痛を伴うものでも屈辱的なものでもなくなっていった。近代以前の時代に抑圧されていた製作者本能が解放されていく。

神話や神学にかわる、怠惰な好奇心が生み出した語りの体系として、初期近代には科学が台頭していった。手工業が中心の近代初期の文化理想は、腕のよい職人であった。その文化理想は世界を創造し、その運行を司る神に対しても投影される。「中世においては、彼自身の特権を維持することを第一に考える宗主であった神が、本来的には人間にとって有用なものを造る職人的な仕事に従事している創造主となる」(Veblen1961: 14)。プラグマティズムの支配から怠惰な好奇心の再生の方へ。権威主義的でエゴイスティックな「宗主」から人間の福利を慮るものとしての神への変容。野蛮時代から初期近代は大きな転換の生じた時代である。しかし、現象の背景に人間的な意図と目的を見出す、未開時代以来のアニミズム (animism)、もしくは神人同型説 (anthropomorphism) から近代初期の科学はまだ脱してはいなかった。

(4) 機械の時代へ

19世紀に入り産業革命を通過すると機械生産が主流の時代が訪れる。機械と日常的に接触することによって、人々の思考習慣は大きな変容を被っていった。19世紀以降の科学の定式化は、近代初期とは異なり、機械的で非人格的なものになっていった。そしてこの時代には技術にも大きな変化

が生じる。「この過程はそれが人間にとって便利であるか不便であるかなどとは考えない。それらを利用するために人々は、ありのままに不透明にかつ非共感的に受け止めなければならない。それゆえ、技術はこれらの事象の解釈を、それらを動かしている人格や、それらを創り出した職人を持ち出すのではなく、機械のことでこれらの現象の解釈を進めてきた」(Veblen1961:18)。科学的知識は工学、農業、医学等様々な分野に応用され、目覚ましい技術革新がこの時代には生じていったのである。

だが応用は科学者の本来の関心ではない。「彼の探究はプエプロの神話作者と同じくらい『怠惰』である」(Veblen1961:17)。科学者と技術者は同じ心性を共有している。そして両者の間には、無機的で機械的な現象の定式化という言語が共有されているから、相互に協働が可能になる。人々の文化的関心の最優先事項は、プラグマティズムから「怠惰な好奇心」を媒介とする私心のない探求である科学へと移っていった。近代初期の科学にはまだ色濃く残っていた神人同型説やアニミズム的思考も、この時代に入ると完全に影をひそめた。

卑俗な実用主義としてのプラグマティズムは、行為の確率を生み、科学は理論を生む。「処世術の精神的態度は、利害のない科学的態度とはすれ違い、その追及は科学的精神と相いれない知的偏向を招く」(Veblen1961:19)。非ヨーロッパ世界で科学的知識の発展が遅々として進まない背景には、これら地域におけるプラグマティズムの優越がある。「神学、法学、外交に関する分野、軍事、政治理論の訓練」は、現代にも残されたプラグマティズムの知の体系である。これらは「懐疑的な科学的精神やその破壊的分子とは相いれないものである」(Veblen1961:20)。

ビジネス・スクールで教授される経営学やロースクールで講じられている法学は、本来は科学ではない。相手を貶め出し抜くことで自らの利益を増大させようとするプラグマティズムに属するものである。この小論に先立って書かれた『アメリカの高等教育』のなかでヴェブレンは、アメリカの大学が、「金銭的職業」に従事する「産業の総帥

たちの支配の下に置かれ、プラグマティズムの訓練を施す部門が肥大化していることに警鐘を鳴らしている。ヴェブレンはまた、ロースクールやビジネス・スクールはもとより、工学や農学のようなテクノロジーに関わる部門を含む実学を大学から分離すべきであるとも述べている。そしていまや中等教育の域に属する学部教育も大学から切り離して、大学の機能を「知のための知」を追及する純粋科学の大学院教育に限定すべきであるとヴェブレンは主張している。このヴェブレンの主張は現実離れのした極論のようにみえる。しかし実利の追求を第一義とするプラグマティズムが、「怠惰な好奇心」の敵対物であることを思えば、ヴェブレンのこの主張も一理あるものといえる(Veblen1918)。

5. 「怠惰な好奇心の赴くままに生きよ」 一水木しげるとヴェブレンの教え

(1) 未開人と庶民の遺産

ヴェブレンは機械過程の支配が人々の間に合理的な思考法をもたらすと考えていた。また『技術者と価格体制』というエッセイのなかでは、私利私欲にとりつかれた資本家ではなく、事実上立脚した公正無私の判断を下すことのできる技術者たちに経済運営の実権をもたせるべきであるという「技術者のソヴィエト」論を展開している(Veblen1921)。

科学主義者でエリート主義者であり、テクノクラート(技術官僚)が社会を支配することを理想としたテクノクラシーの提唱者。これまでそうしたヴェブレン像が支配的であったことは否定できない。たしかにヴェブレンは、機械過程とそれがもたらす合理的な思考習慣を称揚していた。また技術者たちに高い評価を与えていることも事実である。しかしヴェブレンにはテクノクラシーの思想家とはまた別の顔もある。

プラグマティズムが圧倒的に優位していたヨーロッパ中世において、怠惰な好奇心は民衆たちの間で保持されていった。「西欧文明の最新の最も完全な精華が、大農場や大修道院よりも農奴や貧

農の精神生活により類似しているというのは、奇妙なパラドクスにみえる」(Veblen1961:22)。中世の貴人や騎士たちの思考習慣は現代の人間のなかにほとんどその痕跡をとどめてはいない。位階序列を重んじ、神人同型説的な迷信に曇らされて日常些末の事象に関心を示さない中世の高貴な人たちの思考習慣は、いまのわれわれにとって到底理解しがたいものなのである。他方、日常の雑事をこなさなければならぬ庶民たちは、現代人と同じように日常生活の細部に、そこで生じる様々な出来事に、関心を寄せざるを得なかった。だからこそ、彼女らのなかに「怠惰な好奇心」は生き残っていったのである。

水木しげるには「のんのんばあとおれ」というテレビドラマにもなった優れた自伝的作品がある。「のんのんばあ」は境港に住む「拝みや」とよばれる、占い等を生業とするある種のシャーマンであり、彼女のもとに幼い水木は入り浸っていた。「のんのんばあ」は、仏教の教えや様々な弓ヶ浜の妖怪についての伝承を幼い水木に伝えることで、後年の「水木ワールド」の基を築いた人物でもある。先にも示したように、ヴェブレンは、怠惰な好奇心に従うプエプロの神話作者を科学者の遠い祖先と位置付けていた。「のんのんばあ」も神話作者（もしくは伝承者）の仲間であるとすれば、彼女もまた科学者たちと同じ心性を共有していることになる。「怠惰な好奇心」の担い手は、ヴェブレンが例示していた西欧中世だけではなく、封建時代の日本においても下層の民衆だった。かの「のんのんばあ」は、お武家様の末裔などではなく、貧しい拝みやだったのだから。「怠惰な好奇心」と合理的な思考法（それが必ずしも機械過程と親和的ではないにしても）は知的エリートのみならず庶民の特性であるというヴェブレンの指摘は興味深い。

(2) 科学へのアンビバレンツ

ヴェブレンのみるところ、法学、政治理論、神学等々は、冷徹に事象のもつ法則性を追及するのではなく、有用性を追及し、他者をだしぬくための技術としての性格を強くもつ点ではプラグマ

ティズムの知の体系に属するものである。ヴェブレンはこうした科学の「敵」とも呼ぶべきものにさえ、神の「科学」や法の「科学」のような形で、科学が浸透していることを指摘している。そして幅広く深い知識の探求を行う「学問」のなかにまで「科学」が侵食してきていることにヴェブレンは憂慮をみせている。怠惰な好奇心に導かれているという点で科学と学問とは敵対するものではない。しかし、文学の理解において審美眼は重要な役割を果たすが、今日の文学研究においては、批評理論や言語分析等の科学的アプローチが大きく入り込んでいる。言語学的アプローチや批評理論はたしかに有効であろうが、それらをもって文学的な審美眼が磨かれるものではない。科学への鑽孔の念のために学問本来の性格が歪められることをヴェブレンは危惧している (Veblen1961:27-9)。

ヴェブレンは科学至上主義者ではなかった。また科学を十全に発展させた西欧文明を至上のものとは考えていなかった。たしかに西欧文明は現象にたいする即物的な洞察に関しては他のすべての文明を圧倒している。しかし、美的感覚や、勇敢さ、さらには繊細な職人技等においては、西欧を凌駕する文明は過去にいくらかでもあった。科学者の導き出す結論は正しいのかもしれない。しかしそれは善きものでもなければ美しいものでもない。科学の登場は近代以降のことであり、人類の歴史のなかでは極めて新しい。人間は事実の探査の方法を知る以前から人間らしい生活を営んできた。科学という新参者が支配するこの世界に対する違和感を多くの人が抱いていることも故なきことではない。現代人のなかに存在する科学への鑽孔とそれへの違和感というアンビバレンツをヴェブレンは指摘している (Veblen1961:30-1)。

現代人の間にさえ、科学の無機質な事実の記述への嫌悪感が残る。そこには人間的な温かみもなければ、面白みもないからである。科学技術が社会に浸透すればするほど、オカルトや怪獣妖怪宇宙人等々、荒唐無稽な物語への需要も高まっていく (Veblen1961:26)。ヴェブレン自身も、ノルウェーのサーガ（古代の英雄譚）の訳業をライフワークとしていたのである (稲上2013)。科学と

技術が急速に発展し、それが庶民の生活のなかにまで入り込んできた高度経済成長期に、水木しげるの妖怪マンガが広く世の中に受け容れられるようになっていった背景には、まさにヴェブレンが指摘するこうした心理が影を落としているのではないだろうか。

(3) 「怠惰な好奇心」の赴くままに生きよ ーヴェブレンと水木しげるの教え

この小論の冒頭の問いに立ち返ることにしたい。「怠け者になりなさい」ということばで水木は何を言わんとしたのか。水木はその生涯を通してモーレツに働いていた。彼自身は境港の比較的裕福な中産階級家庭の出身であったが、軍隊に召集されて戦地で左手を失い、裸一貫で戦後の混乱した社会に投げ込まれている。優雅な閑暇の生活を送れる立場には、到底なかった。もって生まれた絵を描く才能を頼りに、浮沈の激しいマンガの世界を生き抜いていくためには、モーレツに働く他はなかったのである。『ゲゲゲの鬼太郎』の大ヒットによって社会的成功を収めた後も、彼の双肩には妻子やスタッフ等、一族郎党を養うという重い義務がかかっていた。そうした義務から解放された晩年には、人間は怠惰の生活に戻るべきだという思いが水木にはあったのだろう。

貸本屋時代の『墓場鬼太郎』と後年の「ゲゲゲの鬼太郎」の絵柄の変化のなかに、世に受け容れられるために表現を甘口にする「プラグマティズム」の存在は指摘することは容易である。しかし、『ゲゲゲの鬼太郎』も妖怪マンガも水木しげるのロードも、水木が何の役にも立たない妖怪についての膨大な知識を収集することなしには生まれてこなかった。冒頭の問いに答える時がきたようである。「怠け者になりなさい」ということばによって水木は、「怠惰な好奇心の赴くままに生きよ」と言おうとしたのではなかったか。

科学はそして学問もまた、ヴェブレンも言うように、本来「怠惰な好奇心」に導かれた営為であるはずである。だが日本の大学はいまやビジネスの原理に支配されている。利潤と結びつくような実用的研究が価値あるのとされ、理科系の基礎的

分野や人文社会系の研究は大学から排除されようとさえしている。研究の内実を上げることよりも、競争的外部資金を獲得することが自体が価値あるものとされている。大学の評価がそのことによって上昇するからである。大学教員は、教育研究だけではなく初等中等教育の教員と変わるところのない、学生指導等の「先生」としての業務、そしてオープンキャンパスや高校訪問等の大学のセールスマンの業務に日々追われている。本来暇（スコレ）人であるべき大学人たちが、多忙な人（ビジネスマン）になってしまった。大学はもはや学問の府ではなく、ビジネスの原理に支配されてしまったと考える所以である。

大学教育の分野においても、就職と直結した学修が奨励され、「キャリア教育」という名の、就職活動に利するためのほとんど「疑似科学」と評すべき科目群がカリキュラムの大きな部分を占めている。いまの学生たちは既存の企業社会の枠組みのなかで生きる他に選択肢がないと事実上洗脳されている。現在の学生たちが勤勉に授業に出席し、課題もまじめにこなすようになったのは歓迎すべきことではある。日本の大学は、もはや90年代初頭までの「レジャーランド」でなくなってしまった。だが同時に、怠惰な好奇心に導かれた「遊び」としての学問が姿を消してしまったことも遺憾ながら事実なのである。

日本のマンガの巨人も、アメリカの社会科学の巨人も、ともに「怠け者になりなさい」＝「怠惰な好奇心に忠実であれ」と言っていた。それはプラグマティズムの支配に窒息しかかっている日本の大学人への叱咤激励のことばのように思えてくる。

参考文献

- 1) Paul Lafargue 1887 *Le droit à la paresse* = 田淵晋也訳 2008 『怠ける権利』 平凡社
- 2) Bertrand Russell 1935 *In Praise of Idleness, and Other Essays*, = 堀秀彦・柿村峻 2009 『怠惰への讃歌』 平凡社
- 3) John Maynard Keynes 1930 *Economic*

- Possibilities for our Grandchildren* = 宮崎義一 訳 1981 「わが孫たちの経済的可能性」『ケインズ全集第9巻』所収
- 4) 礫川全次 2014 『日本人はいつから働きすぎになったのか』平凡社新書
- 5) 小谷敏 2013 『ジェラシーが支配する国』高文研
- 6) 小谷敏 2010 『怠ける権利の方へ』小谷敏他編『若者の現在 労働』所収
- 7) 水木しげる 2007 『水木さんの幸福論』角川文庫
- 8) 稲上毅 2013 『ヴェブレンとその時代 いかに生き、いかに思索したか』
- 9) Thorstein Veblen 1899 *The Theory of leisure Class* = 小原敬士訳 1961 『有閑階級の理論』岩波文庫
- 10) 小谷敏 1988 『進化 行動 思考習慣ーヴェブレン研究序説』地域総合研究 16巻1号 鹿児島経済大学地域総合研究所
- 11) Thorstein Veblen 1914 *The Instinct of Workman Ship* = 1997 松尾博訳『経済的文明論ー職人技本能と産業技術の発展』ミネルヴァ書房
- 12) — 1961 *The Place of Science in Modern Civilization* (*American Journal of Sociology* Vol1 March 初出
- 13) 新井田智幸 2010 翻訳「近代文明における科学の地位」『政治経済学通信第8号』東京大学大学院柴田ゼミナール 27-40 頁
- 14) 鶴見俊輔 1986 『新版 アメリカ思想』講談社学術文庫
- 15) Thorstein Veblen 1918 *The Higher Learning in America-A Memorandum on the Conduct of University By Business Man*
- 16) Thorstein Veblen 1921 *The Engineers and the Price System*, = 小原敬士訳 1962 『技術者と価格体制』未来社
- (2) 「近代文明における科学の地位」の訳出にあたっては(新井田 2010)を参考にした。
- (3) プラグマティズムに関しては(鶴見 1986)が簡明な理解を提供してくれる。

註

- (1) ヴェブレンの伝記的事実に関しては(稲上 2013)を参考にした。

